

# 都会の

特集 南田登喜子 [文]  
text : Minamida Tokiko  
ミデイ中嶋 [写真]  
photo : Midy Nakajima

太古から自然と共存する生活を脈々と営んできたアボリジニ。「ドリームタイム」と呼ばれる天地創造にまつ

わる神話や伝説、精霊信仰、生活の知恵や技術、社会の掟といった先人の知識は、踊りや歌、絵を通じて語り継がれてきた。

アボリジニの芸術的センスは、近年高い評価を得るようになり、国際的にも注目を浴びる機会が増えている。2000年に開催されたシドニー・オリンピックの開会式にも、アボリジニを中心に据えた一幕があり、彼らが非常に高い精神文化を継承し、ユニーク

な世界観を発達させてきたことを世界中に知らしめた。

ともすれば「厳しい自然環境の中、伝統的な生活様式を守りながら辺境で暮らす狩猟採集民族」というイメージの強いアボリジニも、現在は4人に3人が都市またはその周辺地域で暮らしている。都会では混血化が進み、身体的特徴など見た目ではアボリジニであることが分らないことも多い。自分は誰なのか？ どこから来たのか？ 街に住むアボリジニの多くが、アイデンティティを模索している。オーストラリアで先住民といえば、



# アボリジニ

オーストラリアの先住民アボリジニは、時間をラインではなく、サークルでとらえるという。そこには過去、現在、そして未来も夢の時も同時に存在する。アボリジニが「滅びゆく人種」だと思ったら、とんでもないセンチメンタリズムだ。彼らは都市にとけ込み、色彩豊かな世界を創り出している。





レッドファーン駅前よりシドニー中心部を望む。壁画には、アボリジニの人々（黒）、彼らの血と大地（赤）、太陽（黄）を象徴する民族旗が描かれている

「アボリジニ」と「トレス海峡諸島民」の両方をさす。大陸北東端のケープ・ヨーク半島沖のトレス海峡に点在する島々をルーツにする人たちは、本土のアボリジニとは別の人種だ。もともと、アボリジニだつて異なる言語や文化を受け継ぐエスニック集団の総称で、単一民族ではない。アボリジニという括りは、生物学的な差異に基づいた便宜的な概念に過ぎない。

先住民人口は現在増加の一途にある、というと驚く人も多いだろう。2001年の国勢調査を基にした統計によると、推定約46万人。これは、オーストラリア全体の人口の2.4%にあたる。20世紀後半からは、加速度的な伸びを示し、1971年からの30年間で4倍近くに増えている。その傾向は都市部において顕著だ。

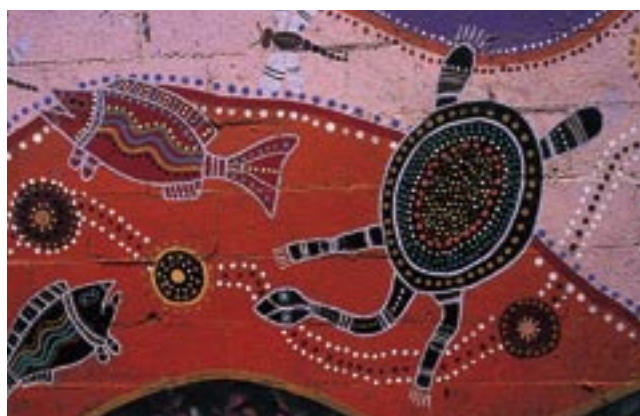
「先住民かどうか」という線引きは、基本的に自己申告による。差別や偏見がひどかった時代に、出自を隠す人が多かったことは想像に難くない。自然増加だけでは説明しきれない人口急増の理由は、自らを先住民と認識する人、先住民の血を引くことを誇りに思うようになった人が増えたから、と考えられている。

中で、ルーツを見失ってしまった人は少なくない。アボリジニの子どもたちを親元から引き離して白人家庭で養育した1920年代〜1960年代の「盗まれた世代」の存在は、昔のことというにはあまりにも生々しく悲しい記憶である。

全国を35地域に分けたATSIIC（アボリジニ・トレス海峡諸島民委員会）エリア別の先住民人口のトップはシドニー地域で、3万8000人を超えている。それなのに、海外からの旅行者は「シドニーでは、アボリジニを見かけない」と口にする。確かに、パフォーマンスやイベントでもなければ、ボディ・ペイントを施したエキゾティックなアボリジニを日常、目にすることはまずないが、ここでは肌が白い金髪碧眼のアボリジニだつて珍しくはないのだ。

オーストラリア人の中にも、「高層ビルの並ぶ都会には、本物のアボリジニはいない」という人がいる。そうかと思えば、白人のシステムに適応できず周縁で生きるしかないアボリジニを「税金を無駄遣いするアル中の怠け者」と色眼鏡で見る人もいる。

国民投票を経て、先住民がオースト



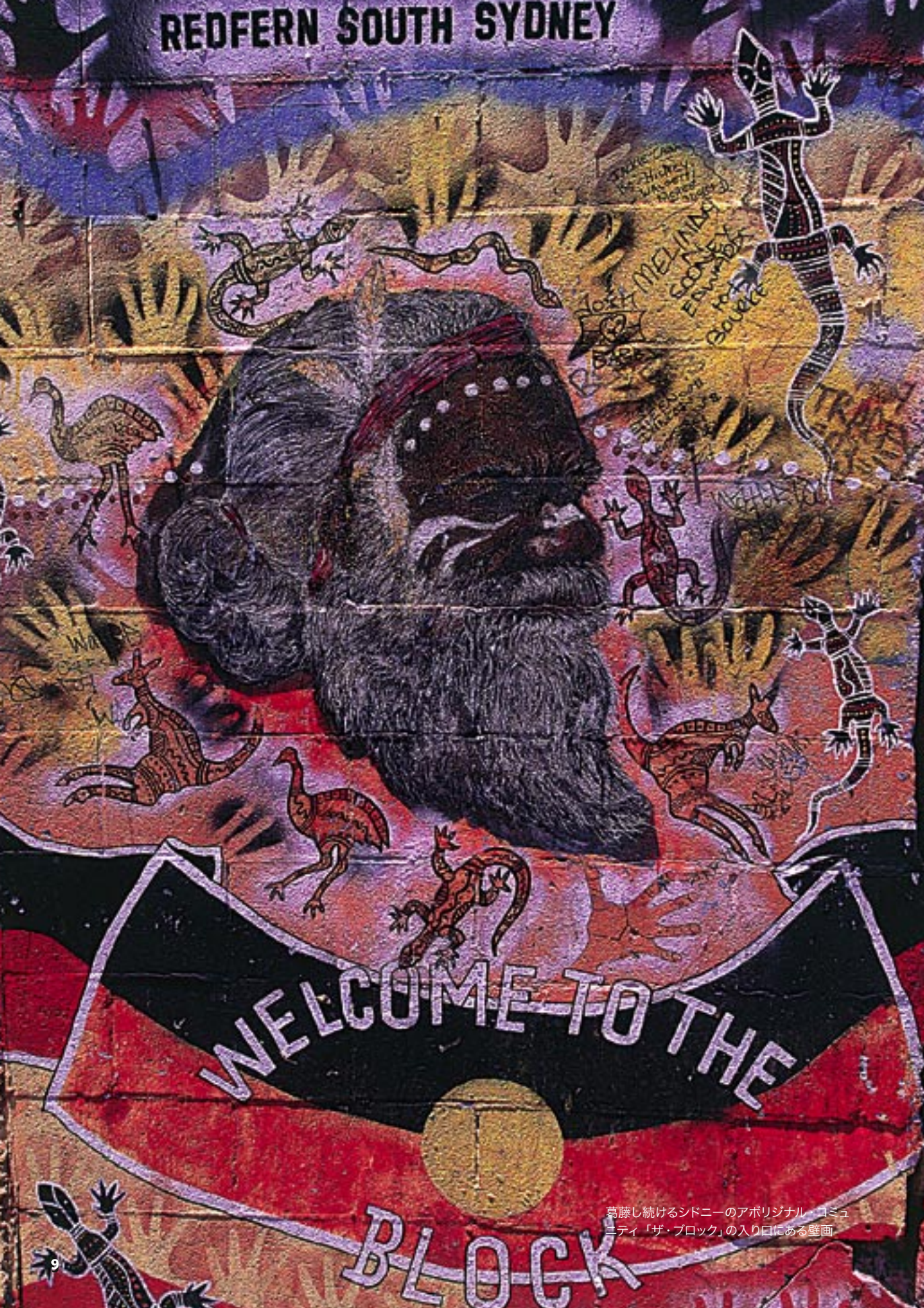
ニュー・サウス・ウェールズ州の州都であるシドニー地域を含む大陸南東部のアボリジニは自分たちのことを「クーリー」と呼ぶ。伝統的にはクラン（氏族）や語族の名前が所属グループを示すのだが、シドニーでは、固有の言語を話せる先住民は人口の1%にも満たない。イギリス人の入植後、虐殺や疫病の蔓延などで人口が激減し、多数のコミュニティーが分裂や崩壊の憂き目に遭った。保護・隔離政策や同化・統合政策といった悲劇的な歴史の

ラリア国民と認められたのは1967年。わずか40年ほど前の出来事だ。制度上の差別は原則としてなくなった、ということになっている。1970年代後半以降は、教育や雇用を中心に、先住民対象の優遇政策が実施されるようになり、彼らを取り巻く環境も大きく変化した。大学や専門学校には特別な入学制度があり、先住民であることを入学条件とする芸術関係の教育機関もある。

皮肉なことに、これまでアボリジニであるがゆえに辛酸を嘗めてきた人々が、「アボリジニに見えない」「アボリ







葛藤し続けるシドニーのアボリジナル「コミュニティ「ザ・ブロック」の入り口にある壁画



ラディー・ティンバリーズ・アボリジナル・アーツ&クラフツ  
Laddie Timbery's Aboriginal Arts and Crafts  
The Loop, La Perouse 2036 NSW  
土曜：9:00～14:00 日曜：9:00～16:00 ころ

## ティンバリー家のクラフトショップ

シドニーのシティ中心部から南に 30 分ほど車を走らせると、タスマン海に面したラ・ペルーズに着く。1788 年にフィリップ総督率いる英国からの最初の入植者たちが到着した歴史的な場所だ。

19 世紀初めにフランス人の探検家によって描かれたアボリジニ「ティンバー」の末裔とされるラディー・ティンバリーは、毎週末その一角に露店をオープンし、彼自身や家族の作ったブーメランやディジュリドゥ（ユーカリ製の伝統管楽器）などを並べる。「ティンバリー・ファミリーは、この場所で 180 年以上アート&クラフトを売ってきた」というのが口癖。興が乗ると、キャプテン・クック上陸にまつわる逸話など、代々ティンバリー家に伝わる物語を商売そっちのけで披露してくれる。



狩猟用具として使用されてきたブーメランも、今は民芸品として人気

「ジニらしくない」といわれるようになってしまった。言語や肌の色、容貌といった客観的なアボリジニ要素の喪失は、内なるアボリジナリティー（アボリジニ性）を意識的に再構築、または新たに獲得しようという動きにつながった。文化的な特性を示すことが「本物のアボリジニ」であることを証明する手立てとなりえるからだ。

かつて文化人類学者が研究対象にしたのは辺境のアボリジニに限られていた。アボリジニ芸術が注目され始めたときも、対象地域は限定的だった。アート・ビジネスや観光政策においては、「消えゆく文化」という印象を付加することが、希少性を高めることにつながるのかもしれない。かくして、多様な文化のごく一部にスポットが当たり、都市で暮らすアボリジニの存在がすつぽりと抜け落ちた。

白豪主義の終焉からわずか 30 年余りの間に、オーストラリアは 200 カ国以上からの移民が暮らす世界でも有数の多文化国家となった。3 人に 1 人が外国生まれのシドニーでは、文化的アイデンティティが絶え間なく交錯している。移り変わる環境の中でアボリジニだけが時間の止まった存在のよ

うに変わらない生活をしていると考えられているのはどうしてだろうか。

都会のアボリジナル・アーティストたちは、伝統文化に敬意を払うと同時に、異文化との遭遇による新しい文化の創造にも貪欲だ。「アボリジニらしい」「らしくない」という外野の批評に翻弄されながら、先入観との戦いを繰り返している。

そのムーブメントの先鋒となったのが、1984 年にシドニーのアートスペースで開催された「クリーリー・アート'84」と題する 25 人のアーティストたちのエキジビション。「伝統」や「部族」ととらわれない「アーバン」の存在をパワフルに印象づけた展覧会は、それまで別々に活動をしてきた都会のアーティストたちが真の平等を求め、連帯感を持つて歩み始めたという点でも大きな意味を持つ。

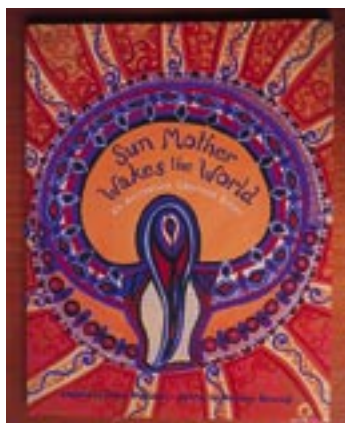
紆余曲折を経て、ようやくアボリジニの血を引く都会暮らしのアーティストの作品も、国内外の美術館やギャラリーに多数コレクションされるようになった。「クリーリー・アート」は、アボリジニ文化として多面的に再生され、未来に向かってダイナミックな変容を遂げていくのだろう。



# ブロンウィン・ バンククロフト

**Bronwyn Bancroft**

クイーンズランド州境に近いデンターフィールド生まれのバンジャラン族。キャンベラ・スクール・オブ・アート卒業後、シドニーに移り、1985年に『Designer Aboriginal』を設立。ブーマリ創立メンバーのひとり。



アボリジニの体験や万物とのつながりを内包した作品は本人以上に雄弁。カンジンスキー、ミロなどに影響を受けたという色彩の表現が印象に残る



画家、テキスタイル・デザイナー、絵本のイラストレーターといった多岐に渡る分野で活躍するブロンウィン・バンククロフトは、1987年にパリのプランタン・デパートでアボリジナル・デザイナーとモデルによるファッション・ショーを仲間と共に成功させるなど、アーバン・アート・ムーヴメントの最前線に立つてきた。芸術関連のさまざまな要職を歴任し、若いアーティストの育成にも重要な役割を果たしてきた人物だ。

アーティスト&デザイナーとして高い評価を受ける一方で、アボリジニを取り巻く不正な環境の是正を求めて、アクティブに活動を続けている。美術教師に「あなたはアボリジナル・アーティストになるには、肌が白すぎる」といわれたから歩いてきた彼女の長い道のりを思う。「好きなだけ絵を描いていられればいいんだけど、まだまだやることいっぱい！」と笑うエネルギーなクリエイターが自分の作品の制作活動だけに没頭できる日は、もう少し先のこともかもしれない。

ブロンウィンが「動」の人だとすれば、独学の画家ジェームス・サイモンは「静」の人。「クリー・アート'84」



昨年12月、メンバー共同のエキジビションのオープニングに集まったブーマリ関係者

ブーマリ・アボリジナル・アーティスト・コーポレティブ  
Boomalli Aboriginal Artists Co-operative  
55-59 Flood St., Leichhardt NSW 2040  
TEL: +61 02 9560 2541  
火～土曜: 10:00 ~ 16:00



## ブーマリが創った 新しい芸術空間

「クリー・アート'84」に続くアーバン・アートの流れを決定づけたのは、10人のアボリジナル・アーティストたちが1987年に結成した「ブーマリ・アボリジナル・アーティスト・コーポレティブ」だ。「ブーマリ」は、ニュー・サウス・ウェールズ州内にルーツを持つアボリジニの複数の言語で「感動させる」「印象を与える」「記録を残す」といった意味を持つ。

アボリジニのアーバン・アートに対する偏見に真っ向から挑む都会のアーティストたちのミーティング・プレイスとして発足したブーマリは、彼ら自身が発言権を持つシドニー初のアート・コミュニティとして発展。コンテナボラリー・アート・ギャラリーを運営するだけでなく、セミナー開催など地域社会への働きかけにも積極的に取り組み、ステレオタイプのアボリジニ文化のイメージ解体への牽引役として先駆的な役割を果たしてきた。

現在はシドニーを拠点に活躍する55人のアーティストがメンバー。それぞれのやり方で、アボリジナル・アートに新しい命を吹き込み続けているブーマリの個性溢れるクリエイターたちに会いに行った。





## ネヴィル・マッケンジー

**Neville McKenzie**

ニュー・サウス・ウェールズ州北部ケンブリッジ生まれのダンガッティ族。幼少時にアーティストの母親から絵を描くことを学ぶ。爪楊枝大の用具を使って細かい点描をびっしり重ねた彼の絵は、どれも大地のパワーを感じさせる。

マッケンジー一家を表した作品

るべきメッセージ。「伝統は壁で守るものではなく、広く伝えることによって生き永らえる」というのが信念で、その姿勢はあくまでオープンだ。

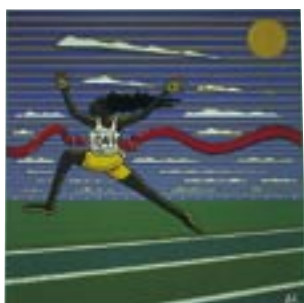
同じダンガッティ族をルーツとするアダム・ヒルは、鋭い批評性を込めた政治的なメッセージや先住民関連の時事問題を盛り込んだ作品で、新しい視点から都会のアボリジニと現代社会の関係を浮かび上がらせる。右の作品は、シドニー・オリンピックでオー



ウエスタン・シドニー大学でグラフィック・デザインを専攻。伝統楽器イダキ（ディジュリドゥ）のパフォーマンスや指導を行うなど、舞台芸術の分野でも注目を浴びる。父方の祖母はネヴィルと同じダンガッティ族。

## アダム・ヒル

**Adam Hill**



ストラリア国旗とアボリジニの旗を2つ掲げて裸足のウイニング・ランをした金メダリスト、キャシー・フリーマン選手がモチーフになっている。

多様な社会を反映するかのようには、シドニーで活躍するアボリジナル・アーティストのテーマや題材、手法はさまざまだ。自由奔放に個性を発揮する作品を目の当たりすると、彼らもまた「今の時」を生きる現代人なのだ、という当たり前のことを実感する。

## ジェームス・P・サイモン

**James P. Simon**

ニュー・サウス・ウェールズ州内陸部ウェリントン生まれのウィラジュリ族。シドニー地域のアボリジナル・コミュニティとして象徴的なレッドファーン周辺の壁画をはじめ、アウトドアを彩る作品も多数。



【上】繊細な独特のタッチで描くキャンバス作品【右】キャンバス作品とは趣の異なる壁画に黙々と取り組む



家族から受け継いだドリームタイムをインスピレーションにして、幻想的な作品を創造するジェームスに対し、先祖代々伝えられてきた伝統をそっくりそのまま次世代に受け継いでいくことが使命だと考えているのが、ダンガッティ族のネヴィル・マッケンジー。

「ストーリーのない絵は描いたことがない」という彼の作品は、一見抽象的に見えても、具体的な場所や登場人物がはつきりしているのが特徴である。彼のいう「ストーリー」は、後世に伝え

に参加したアーティストのひとりで、先住民の人権運動の中心地としてスポットライトを浴びるコミュニティに属し、ブーマリのメンバーとして十数年活躍している。こう聞くと、アクティビストのような印象を受けるが、実際は「勤勉な職人」という形容がピッタリ。駅前や学校ほか公共スペースの壁画などのコミッションワークや各種プロジェクトも多数引き受けている。

家族と共に6歳でシドニーに移ってきて以来ずっと都心に住み続けているというから、カラフルな色彩のやさしく調和的な「ジェームス・サイモンの世界」も、喧騒の都会暮らしから生み出されていることになる。